
ホームレス画家

砂漠の砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホームレス画家

【NNコード】

N6524F

【作者名】

砂漠の砂

【あらすじ】

ある閑静な住宅街の公園に、スケッチブックを持った一人のホームレスが現れる。

太陽はまさに南中に輝かんとし、アスファルトの地面を焼き焦がしていた。西の空には銀色の入道雲が太陽の光を跳ね返している。アブラゼミの鳴く声、蚊取り線香を焚くにおい、シャツが体にへばりつく嫌な感触、五感の全てが、ある一つの季節を志向している。すなわち、夏。

太陽は敵、月と星は味方、という砂漠の国のことわざは、この湿度の高い恵まれた国でも、この季節、普通の人々にはびつたりと当てはまつた。

しかし夏は、特定の住居を持たず、ダンボールを抱えて町から町へと転々とするある種の人々にとっては、敵であると同時に味方でもあつた。確かに、熱中症や脱水症状で死ぬ可能性もあるが、冬のように寒さで病気になつたり凍え死ぬ可能性は皆無だつた。自分から発生するあの恐るべきにおいを我慢すれば、彼らにとつて夏は、恵みの季節であつた。『デラシネ、ノマド、さすらい人、彼らを形容する言葉はいろいろとあるが、この国で一番一般的な呼び名は、ホームレス、だつた。

さて、市立の公園を抱えた閑静な住宅街に、一人の悪臭を放つホームレスが現れた。薄汚い登山用のリュックサックを背負い、手にはなぜかスケッチブックを抱えている。

この中産階級が住まう町にホームレスがうろつくというのは異例の事態である。ここに人が住み始めて以来初めてかもしれない。（ここは、わずか五、六年前に森林を切り開いて造られた小さなニュータウンなのである。）近くに飲食店がないため、彼らがありつくおこぼれがここにはないのである。

今日は月曜日ということもあって町行く人はまばらだが、それでも時折井戸端会議を開く主婦達や、定年を迎えて散歩が趣味となつた老人に出会つては嫌悪の目で見られていた。しかし、彼は住民

の視線をまるで意に介さない。そんなことを気にするような神経では、とてもホームレスなどやることはできないのだ。

彼は、緑が丘公園、と銀色のプレートがはめ込まれたコンクリの直方体（彼はその名前を知らなかつた）を見て、にやつと笑つた。今日の生活圏を探して町中を歩き回つたり地図を見たりして、やつとこの公園を見つけたのだ。これで今日一日落ち着いて過ごせる場所が見つかった。

公園の外周には背の高いカシの木が植えてあり、その内側には背の低いツツジやキンモクセイの木々がきれいな形に刈り取られて植わつていた。

ブランコ、滑り台、鉄棒、砂場……およそこには典型的な公園だつた。そして、御多分にもれず、ベンチが二つ鉄棒の左横二メートルほどの所に一つ設置されていた。

彼はそのベンチに座ると、登山用のリュックからおもむろに何かを取り出した。

まず、右手に持つたのはお祭りなどの時に旗を設置するのに使うポールの小さいものである。それから次に、なにやら文字の書かれた長く白い布を取り出した。彼は、布をポールに結びつけると、ポールを折りたたみ傘のように引き延ばした。それから、ベンチの脇にそびえている常夜灯に、三本の紐でそれをくくりつけた。

風ではためく白い（あるいは白かった？）布には、こう書かれていた。「似顔絵描きます。料金はお客様の言い値で」

彼はいつも、こうしてわざかながらの金を稼いでいた。少なくとも稼ごうとしていた。しかし、一日の間に一銭も入らないことの方が多く、結局コンビニで賞味期限の過ぎた弁当を分けてもらはうなどして生き延びていた。

ホームレスに好きこのんで似顔絵を描いてもらおうと思う例外的な人間がこの町にいるはずもなく、彼は暇をもてあましていた。

仕方なく、公園から見える風景を描く。といつても彼は写実的に描こうとしなかつた。現代において、写実的に描くのは、そういう

う絵が売れるからである、つまり写実画を描くのはお金に魂を売つたやつである、彼はそう信じ切っていた。

彼は、自分の絵が二十世紀前半のキュビズムやダダイズムの正当中後継者であると認識していた。遠近法は崩壊し、パツと見てそれが何の絵なのかまるで分からなかつた。そんな絵を描いているものだから、ますます彼に絵を描いてもらおうとする人間は減つた。たまに彼に絵を描いてくれといつてくる奴は、決まって同じホームレス仲間だつた。ホームレスから金は取れないから、そういう場合結局画用紙と鉛筆代を損するのだつた。

そして、今日もいつものように寄はなく、ただ公園には鳥や蝉の鳴く音と、鉛筆と画用紙が擦れ合つ音が響いているだけだつた。

やがて、太陽は西に傾き、空の低いところにある雲がオレンジ色に代わり初めて、カラスが鳴きながらねぐらに帰る時間になつても、彼はその公園にいた。今日はこのベンチでねるかな、などと思つていると、なにやら若い女の声が二、三聞こえてきた。

女子高生が三人、公園に入ってきたのだった。彼女らは、ベンチに座る偉大な画家に一瞥をくれると、舌打ちして砂場の方に歩いていった。そちらにもベンチが二つおいてあるのだ。

男は知らなかつたが、彼女らはこの辺りでは有名な私立高校に通うお嬢様達だつた。

「お二人とも、私達の学校で一番美しいのは誰だと思いますの？」

グループのリーダー格とおぼしき女が言つた。

「それはもちろん、あやめさんですわよ」

「そうそう、私もそう思うわ」

二人の女はそう「ゴマ」をする。だが、男の目から見ても、そのあやめという女はかわいかつた。

「そうですわよね！　自分で言うのも何ですが、わたくし、可憐な顔立ちをしてるし、体つきもすばらしいし、お勉強もできるし、あの学校でもっとも輝いている女ですわ」

良くそんなことを恥じらいもせず言えるものだ。それとも最近の

女子高生はみんなこうなのだろうか、と男は思つ。

男は鉛筆を握りしめた。女子高生を絵に描ける機会などそつはない。彼女らが話しに夢中になっている間に、さつと描いてしまおつ。「それなのに！ わたくしが一番であるべきなのに… あの瓜生忍とか言つ女！」

彼女らの位置がやや遠いのが難点だが、ここならじつくり観察できる。男は今まで描いていた風景画を中断し、スケッチブックのページをめぐると、あの大声で話している女子高生を描きはじめた。「学年成績で私の上をいきましたわ。わたくしが十位で、彼女は六位。べ、別にそれだけなら問題はないわ。勉強だけが恋人のガリ勉女みたいのはいくらでもいて、その人達に負けても別に悔しくはありませんもの。でも、あの女は違うわ。大して勉強している風には見えないので、成績はいつも上位。まあ、それでもまだ許せるわ！ でも」

男は黙々と彼女をキュビズムの最終形態のような姿に変形させてゆく。

「あの女。顔も結構いけるんじやありませんの？ だって、数学教師の山田なんて彼女が黒板に回答を描いている間中ずっと眺めていましたもの。いろいろなうわさ話でも、瓜生忍は美人だとかそういう声をちらほら耳にします。だから、あなた達にもう一度聞くわ。私達の学校で一番美しいのは誰？」

「もちろん、瓜生忍なんかより断然あやめさんですよ」

「そう、そう」

取り巻きの一人は必死で頷く。

「それなのに、あの女つたら。私達が、クラスで一番暗い遠藤美紀子と何とかお友達になろうと、一生懸命話しかけていたのに、『そうやつて遠藤さんをいじめるのはよしなさいよ』とか言つてきて。そりやあ多少はからかっていたけれど、いじめているつもりなんて全然なかつたのに…。何で私達が悪いって事にされなくちゃいけないの？」

「あのときはむかつきましたわ、私達も、ねえ
「ええ、ええ」

「だから、あの女にはどうやって仕返しをしてやるのか……」

何か、女子高生の権力闘争のようなものを見せつけられて若干ぞ

つとしたが、その程度で彼の鉛筆の動きは止まらない。

「ま、まあんな女、私が本気を出せばこちこちでしうけれど……

…あ？」

彼女が男の方を見た。

「ちょっとそこのあなた！ 何を描いてらつしやるの！？」

彼女はベンチから立ち上がると、つかつかと男の方に歩いてきた。

取り巻き達も、慌ててそれに従う。

男は慌てた。絵を描くのに熱中しすぎて、彼女たちの動向に気を配らなさすぎた。

男は三人の女子高生に囲まれた。

「あなた、臭いわよ。市民の迷惑だから、この公園をうづうづくの、止めてください。まあいいわ、そんなことより、あなた、私達の絵を描いていたでしょ？」

あやめはきつい口調で男を問い合わせる。

「いや、その……」

男は口ごもる。

「あなた……ホームレスのくせに絵を描くの？ 似顔絵を描きます？」

あやめは常夜灯に取り付けられた幟をみた。

「あら、似顔絵でお金を稼いでらつしやるの？ 世の中にはそういう人もいらつしやるのねえ？ ……まあ、わたくしが美しいから絵に描いてみたくなる気持ちは分かるけれども。ちょっと、どんな絵を描いたのかしら？ 見せてご覧なさいよ」

男はスケッチブックを胸に押し当てる絵を隠した。だが、あやめは男から強引にスケッチブックを奪いとる。

「……なに、これは？」

そこには、晩年のピカソを上回る、すさまじい女性像が描かれていた。

「これがあたくしだって言いたいの？ あなた、田はちゃんどついてる？」

「いや、その……。これが芸術というもので……」

取り巻きの二人がその絵をのぞき込んで忍び笑いをしている。あやめが睨みつける。

ビリツ、という音がした。あやめがスケッチブックから問題のページを切り離したのだ。ビリツ、ビリツ、ビリリツ、彼女は画用紙をめちゃくちゃに引き裂く。ばらばらになつたそれらをわざわざ「ミ箱の所まで歩いていって放り込み、また男の所に戻ってきた。

「いいこと！ 美しいものを美しく描く！ これが芸術でしょう！」

そんな単純なことも分からぬから、あなたホームレスなんかやつてるのよ！ ねえ、あなた達！」

「そのとおりですわ」

「まつたく」

「もう！ この公園での女への仕返しを考えようと思つていたのに！ あなたみたいな人がいると考えただけで虫酸が走りますわ！ 今日は終わり！ 皆さん帰りましょう！」 彼女は地面をどかどかと踏みながら、公園から去つてゆく。とりまきたちも、あやめのまねをしてつかつかと歩いて去つていった。

日は山の端に沈み、月がその輝きを増しつつあつた。まだ暑いとはいえ、もう九月に入つてゐる。日の沈むのはだいぶ早くなつた。常夜灯がともり、男の体は青白く染まつた。

あの女の子達、口では相当のこと言つていたし、せつかくの傑作を破かれてしまつたけれど、でも、ホームレスの俺を忌み嫌うことなく対等に話してくれた、そんなに悪い子達じやないのかもしれないな、と男は思った。

男はダンボールを敷いて、早々にねる準備を開始した。

と、そこへ、またも先ほどの子達と同じ制服を着た女の子が一人、

やつてきた。手には高級そうなスケッチブックを持っている。この公園の夜の景色を描こうというのだろうか。なかなか風流だが、警戒心がなさ過ぎる。逢う魔が時に年頃の娘が、人通りのない公園をうろうろしていたのでは、犯罪者に狙つてくれといつているようなものではないか。実際この公園には怪しい男が一名いるわけだし……。

ところが少女は、男の存在に気がつくとすたすたと歩み寄つてきた。そして、ダンボールの布団に横たわつている男の顔に合わせるようにかがんで、口を開いた。

「お兄さん。その旗見たんだけど。似顔絵描けるの？」

これには男の方が驚いてしまつた。ホームレスに話しかける女子高生が、今日だけで二人……。

「あ、ああ。描ける。ただし普通の写実的な似顔絵じやないぞ。キユビズムを俺なりに進化させた、芸術作品だ！」

男は精一杯堂々と言つた。

女の子はにっこりと笑つた。男の心臓が高鳴り、彼女の顔から目が離せなくなつた。

「わたし、画家を目指してゐるんだ。デッサンとかも頑張つてるけど、今私の中で旬なのは夜の風景を描くこと。……お兄さん、今日出会つたのも何かの縁だから、私の似顔絵描いてくれない？」

「構わないけど……。俺のこと怪しまないのか？　君を襲つてレイプしちやつたりするかも知れないんだぞ？」

彼女は首を振つた。

「ううん。大丈夫。あなたはそんな人じやない。私には分かる」

「分かる？　根拠は？」

「私はね、小さいころから、その人がどういう人間なのか、これからどうなつていくのか分かつたんだ。まあちょっとした超能力つてやつかな？　信じてもらえないだろうけれどね」

「……」

男には、彼女が本当のことを言つてゐるようみえた。

「そ、そ、うか。じゃあ、あんたここへ座れよ。俺が立つて描く
いや、私が立つわ。だつて座りながらじゃないと、描けないでし
よ」

「そ、うか、す、ま、ない。じゃあ、俺の正面に立つてく、れ
そ、う、い、い、な、が、ら、男は鉛筆を手に取つた。

少女はとてもかわいかつた。男は絵を描いている間中心臓がばく
ばく鳴つて、なんだか名前の分からぬ脳内物質がドビュドビュ分
泌されているようだつた。それが恋愛感情だと言うことに、男は氣
がつかなかつた。

男は彼女を自分のスタイルで描いた。それは例えピカソでも、ミ
ケランジエロでも描くことのできない独特的のスタイルだつた。

「俺はこれでも芸大を出でるんだが……」

男は鉛筆を動かしながらぼそつと言つた。

「ええ！ それならエリートじゃない。何でホームレスなんかやつ
ているのよ？」

「俺は、お金のために絵を描く」ことができないんだ。あくまで自分
の描きたいものを描く、それが芸術だろ？

「……でも、どこかで妥協しないと、本当に……」

少女が「本当に……」の後に、何を言おうとしたのか男には分か
らなかつた。

「さあ、できたぞ」

男は、彼女に絵を見せた。常夜灯が一瞬瞬いた。

「……す、ご、い！」

彼女は純粹に驚いていた。

「私は美術史が好きで、いろんな本を読んできただけれど、こんなス
タイルの絵は初めてだわ」

「そ、う、だ、ろ、う」

男は満足そうに頷いた。

「お兄さん、あなたはこんなところでホームレスをやつて、いる人じ
やないわ。歴史に名を残す人よ！」

「おいおい、そんな絵一枚で大げさな」

「いいえ。私には分かるわ。……今晚、私の家に泊まりに来ない？ ほんどの人は学校に電車とかで通っているけれど、私の家はこの近くにあるの」

男は、またも驚かされた。

「そんなこと言つたつて、家の人気が嫌がるだろ？」

「大丈夫、今日はパパもママも出かけてるから」

「だつたらなおさら」

「大丈夫。あなたが私を襲つたりはしない人だつて分かつてゐつて、せつて言つたでしょ」「ううん」

正直、この少女の言つことは魅力的だつた。

「食事も出してあげるし、お風呂にも入つてもらうわ。……ていうかまず一番最初にすべきなのはお風呂にはいることだわ」

男は涙が出るほど嬉しかつた。

「……じゃあ、お言葉に甘えさせてもらつよ……」

少女の家は、公園のすぐ近く、築五年、この辺りが宅地開発されたとき建てられたものだつた。

家の表札には「瓜生」と書いてあつた。

「ひょつとして、君の名前、忍つて言つんじゃないかい？」

「そうよ、どうして分かつたの？」

「実は……」

男は、今日の夕方公園であつたことを話した。

「ど、いうわけで、そのあやめとかいう女、君への復讐を考えているらしいけれど」

「ああ。大丈夫大丈夫。彼女、口で言つほど悪い人間じゃないから。私には分かるの」

「ふーん」

彼女の家にはいると、男は真つ先に風呂に入らされた。汚れを落とし、無精ひげを剃ると、男はかなりの美男子だつた。

その後で、忍と一緒に食卓で向かい合つて食事をした。

「お母さんがいないから、レトルトカレーだけビ、『めんね』
『いや、ありがとう』

男はご飯を口にかき込みながら言った。

「こんなに美味しい食事は初めてだよ」

男は自分の頬をあついものが伝うのを感じた。

食事をしながら、一人は、レオナルド・ダヴィンチや伊藤若冲やヴァシリー・カンティンスキーの話をした。それから、男は、もし美大や芸大を受けるなら必ず注意しなければならないことを話した。何しろ男は芸大合格者なのだ。

そして、男と忍は、互いの絵を講評しあつた。それは、とても素晴らしいひとときだつた。

少女は彼に、お父さんお母さんの寝室で寝るよう勧めたが、男はそれを固辞し、居間のソファーで眠つた。

それでも男は、久しぶりで柔らかいものの上でぐっすりと寝ることができた。

朝、七時頃、少女が男を起こした。

「さあ。悪いけど、ずっと泊つてもうつわけにはいかないの。お父さんお母さんが帰つてくる前に、さよならしないと」

「ああ。ありがとうございます。このお礼は、いつか必ず」

「お礼なんていいわ。……たぶんこれは私の予感だけれど、私達は放つておいてもいざれ再会するわ」

「そうか。まあ、お互に絵の道を進むんだからな」「そういうこと」

そういうながら少女は、手に持つた財布から一万円札を取り出した。

「お兄さん。私に出せるのはこれだけだけど、これで何とか生活の足しにして」

「……すまない」

男は深々と頭を下げた。

男が家の外に出ると、もう蝉がすさまじい音で鳴いていた。だが、その音に混じり秋の虫の鳴き声が聞こえた。カナブンが男にぶつかって転げ落ち、しばらくもがいた後でまた飛び立つていった。

男はすぐに画材屋に飛んでいくと、水彩画に使う道具を買った。一ヶ月前にほとんどの絵の具を使い切つて以来、鉛筆だけで絵を描いてきたのだ。

彼はまたある町の公園に現れ、ベンチに座ると水彩画を描きはじめた。モチーフは心の中の瓜生忍だつた。

彼はその絵を、現代絵画選抜展という企画に応募、見事に入選した。

それがきっかけとなり、彼の名は美術界に知られるようになった。その後三年の間に四つの賞に輝き、絵も売れるようになつた。そして今や彼は、日本で最前線を走る画家の一人となつた。

頭の固い評論家は彼の絵を貶したし、一般人の評価も好悪別れたが、同じ美術を志す仲間からは高い評価を受けていた。

そんな中、ある美術雑誌が彼の特集を組むというので、男は東京にある出版社に出かけていった。あのときのように、暑い夏だつた。その時、男は運命の再会を果たした。瓜生忍は、その出版社専属のイラストレーターとして働いており、今回はその美術雑誌に挿絵を描くというので、同じ編集室に来ていたのだ。

「やっぱり、お兄さん、名を成す作家になつたじやない」

彼女はそういった。

「君も、出版社専属のイラストレーターになんか良くなれたなー！」

彼らは、再会を喜び合つた。

その後二人は、プライベートで会つようになり、やがて男がプロポーズをした。

二人は素晴らしい夫婦となつた。

男も忍も、幸せになつた。

「くやしい！ 何で瓜生忍が有名画家と結婚できたのよ！」

その報を聞いたあやめが、そう取り巻き達に言ったとか、言わないとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6524f/>

ホームレス画家

2010年10月8日15時46分発行